

アウグステイヌスの形而上學の將來（ヂルソン）

長 澤 信 壽

二、アウグステイヌス主義の意味

今日アウグステイヌス主義が惱んでゐる困難は我々がその治療の方法を探ねなければならぬやうな疾患ではない、蓋し聖アウグステイヌスは、如何なる疾患にも惱んでゐるのではないからである。たゞアウグステイヌス主義者のアウグステイヌス主義から、聖アウグステイヌスのそれに歸ることが必要である。而も此の仕事は決して容易ではない。見地を變へると言ふことは慣習を變へることであるから、最も抽象的な形而上學の問題に於ても、思惟に抑制を加ふべき餘地がある。それ故に我々は、眞の意味のアウグステイヌス主義の讀者の目前に、アウグステイヌス主義とは斯々のもの

であると我々が信ずるものを單に置くだけで、彼等を信服せしめようと決して自負するものではない、それは、たゞ最も善い信仰を我々が誤解してゐる恐れがあるのみならず、假令我々に理由があるとしても、時をしてその爲すべきことをなさしめ、且つその觀念を自ら熟さしめなければならぬからである。問題は、今日人は機關を逆轉せしめて、三世紀に亘つて觀念論が聖アウグステイヌスの教説を通過したそれ以前に於ける、聖アウグステイヌスの眞相を、再び見出すことが出来るか否かを知ることである。若しそれが可能であるならば、それを成し遂げる爲に、聖アウグステイヌスの體系からデカルトの方法を除去することが、そ

の根本的措置である。

乃で此等二つの哲學が決して本質的關係をもつてゐるものではないこと、兩者の間に假令關係がありとするも、精々、それは謂はゞ一方的であつて、聖アウグステイヌスとデカルトとの關係ではなくして、デカルトが聖アウグステイヌスに對する關係であることを、何よりも前に知ることがたしかに大切である。デカルト哲學の第一原理は普遍的數理主義であつて、それはそれが伴ふ觀念論的方法を有するものであることを認めるならば、人はまたそれと等しく自明なこととして、かくの如きものは決して聖アウグステイヌスのうちに存在しないことを認めることが出来るであらう。しかし人がこのことを願慮するならば、其れよりして、二つの哲學が同じ概念を用ひ、それらと同じ順序に配置する場合にも、兩方は決して同一のものを意味してゐるのではないことが知られ

る。聖アウグステイヌスの *Si fallor sum* がデカルトの *Cogito ergo sum* を備進したか否かは別として、それは同一の意味を擔はされてゐるものではないのである。バ斯卡ルはこのことをデカルトに祝ふたが、恐らく人はそのことを聖アウグステイヌスにも祝ふてよいであらう。

「我思ふ」をデカルトは全建築の根本的基石として其の形而上學の發端に措き、先づ普遍的數學の名に於て、判然且つ明晰なる彼の觀念の中に含まれてゐるものを悉く、思惟に歸屬し、それと相須つて其處に含まれてゐるものしか思惟に歸屬せしめないことに決めた。斯様に解して見ると「我思ふ」は多くのものを否定すると共に多くのものを肯定してゐる、それは寄せ集められた概念の小片の系列の先頭にあるものに外ならない、而も此の概念の小片が累進的に、實在の連續の代りに抽象の寄木細工を置き、具體的なるもの、諸局面の間

に越すべからざる溝渠を穿ち、かくしてそれを越えようと試みるために幻の橋を工夫しなければならなかつたのである。しかしながら今は、形而上學が「我思ふ」のために引き入れられた無数の困難を曝露すべき場合ではない、我々に關係することは次のことに注意しておくことである、即ちデカルトの「我思ふ」そのもの・換言すればデカルトが取つた一切の態度のうちで、最も確實に、我々に眞の實體性を有する具體的實在を與ふる筈の夫れが、實は、此の實在のうちで觀念中に存在し得るものしか我々に與へないのである、何となれば思惟の觀念が我に就いて含まないものを、それは否定するからである、*A non nosse ad non esse valet consequentia* (知らぬことから在らぬことが歸結せられる)。

反對に、若し人が聖アウグステイヌスの態度を考へて見るならば、それはデカルトの態度とは著

しく異つたものに見えるであらう、そして彼のテーゼの各々は能産力のあることを示してゐるが、デカルト學派はかゝる能産力をその嚴格さそのものによつて涸渇せしめてゐる。先づアウグステイヌス主義は觀念に適用せられた一つの方法ではなくして、思惟の具體的内容をたづねる諮問である。聖アウグステイヌスに於ても、デカルトに於けると同様に、たしかに人間はたゞ觀念を通してのみ把握せられるが、しかし聖アウグステイヌスは、彼の內的經驗が數個の單純な自然や規定せられた本質に裁斷せられると、前以つて信じてはゐなかつた。彼は全體的人間を取つてそれを考察し、それを觀念の形になす時に於てさへも、觀念をして彼の考察の經驗的内容を寫さしめてゐる。彼の偉業の根本的性格は愛より生ずる、而もデカルト主義は此の根本的性格を擁護しなかつたばかりではなく、却つてそれを體系的に抹消し去つたのであ

る。聖アウグステイヌスの教説が形而上學であらうとした程度に應じて、それは心理學的經驗論 (empirisme psychologique) を基礎とした形而上學であつた、或は内的經驗の形而上學——若し人が此の語を可とするならば——であつた。其處よりして極度の順應性・更新する力が生じ、また前途に進歩の永續的可能性を殘した未完全性が生じたのである。

此の本質的特徴はアウグステイヌスの反省の出發點からして明らかである。その反省も亦先づ疑ふことに始つた、しかし此の疑ひは、デカルトのそれの如く方法的でも、有意的でもなく、まして更に故意でもない。聖アウグステイヌスは眞理を發見することが疑はしく不確かで殆んど絶望的であることを知つた。フランスの哲學者にとつては、合法的な思惟の最初の出發點に過ぎなかつたものが、聖アウグステイヌスにとつては具體的

な惱ましき經驗であつた、其れは、彼が其れに苦しみそれから平癒せられた疾患である。爰に、彼が發見して我々に提供してくれた治療法も、病氣そのものと同様に、最早必要ではない理由が存在する。「若し余が誤るならば余は存在する」と言ふ彼の言葉は、懷疑的不安が可能的危險として脅威を與ふる度毎に、時機を逸せず現れたが、しかし其れは決して教説の全體が展開せられる出發點に位地を占めたのではない、蓋し疑ひに對して根本的豫防となるものは「我思ふ」であるよりも寧ろ信仰の作用であるからである。神を信じ、神の語を信するものは、「我思ふ」に比して無限にゆたかにして能産的な眞理を有つてゐる、「我信す、故に我知る」の方が「我思ふ、故に我在り」よりも、第一原理としては價値が高いのである。

同じ理由で、アウグステイヌスの經驗論は、「我思ふ」の中に、デカルトの數理主義がそこに見出

すものとは全然異つたものを見出す、何となればデカルトが、前後にたゞ一回だけ、「我思ふ」に於て直接的に見出さうと努めたものは、規定すべき思惟の本質だけであつたが、反之、聖アウグステイヌスは、探究すべき全體的人間、即ち肉體・靈魂・恩寵に他ならぬ人間、を其れに於て見出したからである。此の點は敢て爰に力説する價值のあるほど重要さをもつてゐる。

三世紀に互る觀念論は我々をデカルト的方法に非常に親しみ深く順應せしめたために、其れが存在しないことを觀取する場合にはいつでも、我々は空虚を觀取するが如くに思ふ。けれども我々が爰に遭遇するものは「デカルト的方法に」満ちてゐる。聖アウグステイヌスが先づ第一に見出したものは、彼の思惟である、しかし聖アウグステイヌスは、思惟をより善く規定するために思惟ではないものを、假令暫定的にもせよ、否定しないで、

却つて思惟ではないものをも、またその中に見出したものをも、悉く思惟と共に取り上げた、それは其れを思惟に比較し、思惟の中にその地位を與ふるためであつた。それ故に彼の思惟は思惟する人間の夫れである、而もその人間は、他の精神の間にある精神であるが、その限りまた他の肉體の間にある肉體である。思惟を分析すると言ふことが、思惟そのものを分析することである限り、彼にとつては、全く其處に現れてゐる存在を分析することである。彼は其處にあらゆる程度の實在が複合的に且つ階段的秩序をなしてゐることを見出した、即ち無機的存在・それはたゞ存在するだけのもの、植物・それは存在し且つ生きるもの、動物・それは生き且つ感覺するもの、最後に人間・それは生き、感覺し、思惟するもの、が夫れである。直接的に把握せられるやうな思惟は、其れ故に、爰に於ては他よりもより高き秩序の生であ

る、従つて其れは他を自己のうちに於て捕へる、併しデカルトに於けるが如く自己の本質に對して他であるものとしてではなく、却つて低度の潜在力としてある、而して思惟は此の潜在力を實現せしめざるを得ない、蓋し思惟は最高の段階を占むるものとして直接的に把握せられるからである。聖アウグステイヌスの「我在り」(sum)は一舉にして人間の存在を肯定するのであつて、人間一半を肯定するのではない、即ちそれは他の一半と結合するために絶望的に抗争する一半ではないのである。

爰に現代的アウグステイヌス主義が、真正のアウグステイヌス主義に負課した不曲の起源があるやうに、我々には思はれる。人は、ともすると故ら、其處に首尾一貫しない觀念論しか見ない傾きがある。しかし若し我々にかういふ言ひ方をする事が許されるとすれば、聖アウグステイヌスは

それを認めなかつたにもせよ、事實上、彼の哲學も亦根本に於ては聖トーマス・アキナスの哲學と同様に實在論的である。人はヒュームを通して聖トーマスを讀むことが出来るであらう、そしてそれは事實行はれたことである。また人はデカルトを通して聖アウグステイヌスを讀むことが出来るであらう、そして後の場合に人が把握する聖アウグステイヌスは、前の場合に人が把握する聖トーマスと同様の價值しかない。假令「實在論」といふ言葉の使用がしばしば避け難いにもせよ、我々は此の語を決して愛好するものではないことを告白しなければならぬ。おそろくいつか此の言葉が伴ふ或る意味を拔淨し去つた時に、人は恐るゝことなく此の語を使用することが出来るであらう。それは兎も角、抽象的觀念をもつて實在に代へ、幾何學的分析をもつて具體的經驗の探究に代へることが、真正のアウグステイヌス主義の本質その

ものと相容れないことには少しの疑ひの餘地もない。人は自分のもの〔哲學〕にアウグステイヌス主義とは異つた方法を適用することが出来るが、併しその時にはその人は最早アウグステイヌス主義者でないことを承知しなければならぬ。

若し此の點が明瞭に見られるならば、人は決して聖アウグステイヌスが存在論者であつたとか、或はそれを充分究めることなしに、存在論に誘つたとかいふ幻想を、決して有ちはしないであらう。マールブランシュ(彼を固より我々は存在論者とは考へない)、デオベルチ、その他多くの人々は、神の光明に關する聖アウグステイヌスの原典を巧妙に解釋して、彼等の觀點を正しいものとし得たと信じてゐる。優秀なるチリアーラの如きトーマス主義の解釋者は、同じ方法を用ひて反對の措置を試みてゐる。此の方法も確かに時機を待たなければならぬが、しかし結局、その價值はそ

れを支持するイデオロギイの價值に他ならない。かくの如き分析によつて人が示し得る一切のことは、聖アウグステイヌスの用ひた文字が、或る時は存在論に誘ひ、或る時は其れを拒むと言ふことである。併し文字は何を意味するか。それを知るためには觀念に至る必要がある。併し爰にまた、一切の存在論はアウグステイヌス主義の觀念論的解釋を豫想し、此の解釋と共に崩壞するやうに思はれる。

聖アウグステイヌスの方法は上記の如きものであると言ふことが認められると想像するならば、我々の研究の餘儀なき出發點として我々に與へられるものは何であらうか。其れは即ち事實であつて、其れ以外のものではない。⁽³⁾此の事實は内的經驗の事實であり得るしまたしばしばあるが、それはまた觀念であり得る、しかしそれは演繹の原理と考へられた觀念ではなくして、歸納の根本と考

へられた觀念である。神の存在の問題はその教説の中では如何なる特權をも有つてはゐない。其れは、問題になつてゐる實在性に關する。従つてまた其れに達することが許されてゐる所與の性質に關する。獨自の場合である、けれども此の所與は他の一切の所與と内容に於ては異つてゐるが、性質に於ては異つてゐないのである。存在の如く、生の如く、感覺の如く、思惟の如く、眞理も亦事實である、そして他の事實の如くそれは經驗的觀察のうち、に於て我々に現れて來る、また他の經驗的觀察の如く、それは、眞理の形而上學に、その充足の理由を見出すことを要求する、乃て若し神のみがその充足の理由であるとすれば、我々は既に神の存在を證明したのである。爰には、嚴密な哲學的秩序から發して、神祕的直觀に結合し、それ〔神祕的直觀〕をもつて哲學的秩序に代らしめやうとするものは何ものもない。神祕的秩序は確かに

豫期せられ、希望せられ、準備せられてゐるが、しかし我々は未だ其處に至つて居らず、其處から非常に離れてさへゐるのであるから、純粹な哲學によつて、それに達することは到底不可能である。〔故に〕認識の秩序を重ねて慈愛の秩序を置くことが先づ必要である。

それ故に聖アウグスティヌスを存在論的に解釋することには悉く、彼の心理學的な根本的經驗論に對する・多かれ少なかれ全き誤解が前提となつてゐる、このことはまたかくの如き解釋〔をなす人〕が其處に觀念論を導入し得ると考へた理由である。聖アウグスティヌスの第一認識 (primum cognitum) は神ではない、それは宇宙に於ける人間である、そして此の宇宙と此の人間とに於ては、それは眞なる判斷の經驗である。けれども我々は爰に此の第一認識が第一實在 (Primum reale) ではないことを附加しておかなければならない、

何となれば反對に其れは、それを説明する超越的なるものうちに、充足の理由を見出すことを條件としてのみ、知解せられるに至るからである。

此の超越的なるものが人間の上にその標示と調印とを残すこと、此の調印を我々はたゞ眞なる思惟に於てのみはつきりと讀み得ること、このことを肯定することがアウグステイヌス主義の本質そのものである、しかし乍ら押印は印鑑ではない、そして此れを忘れることは、間違ひなくアウグステイヌス主義を破壊する態度である。聖アウグステイヌスは、デオベルチの如く、第一認識は其の限り第一存在であるとして、其れより出發したのではない、却つて彼は複合的認識から出發する、そしてそこに彼は實在の秩序によつて區別したが、實在の秩序はまた第一存在の實在を要請する。一度此の存在が把握せられ指定せられるや、人は、最早演繹の秩序ではなくして、産出の夫れ

である秩序に、更に入つてゆくことが出来る、しかし尙ほ人は、その出發點となつたものが原理ではなくして結果であることを忘れてはならぬ、蓋し我々自身が結果に他ならないからである。其れ故に聖アウグステイヌスの文字が如何であつたにもせよ——我々は、それが如何なる意味をもつてゐたかを、他の所で示さうと試みた——アウグステイヌス主義の全體を否定することを意味せざる限り、それは存在論を意味することは出来ない。神的光明の教説は第一原因の考察ではなくして、却つて、結果から出發して第一原因、即ち眞理への歸納である。

併しながら、我々は此の眞正な性格をアウグステイヌスの經驗論に再建するために、此の道を尙ほつゞけて行かなければならぬやうに思はれる。歴史の過程に於て其れが受けた損傷のうちでも、最も理解し難いものは彼の宗教的靈感の夫れであ

る。恩寵(の觀念)を缺いたアウグステイヌス主義と言ふが如きものは、確かに奇怪な形而上學的怪物である。それにも拘らずかくの如き怪物が生れたのであつて、而もそれを生ませたのは亦デカルトである。固よりデカルトが嘗て恩寵を否定しようとして夢想したと言ふのではないが、併し其れは數學的把握の下に入つて來ないものであるが故に、彼は其れを哲學以外の秩序の中に放逐し、概念的寄木細工の他の斷片と同様に、それを孤立せしめなければならなかつた、而も此の概念的寄木細工が彼にとつては却つて實在であつた。之に反して聖アウグステイヌスにとつては、出發點の「我在り」が彼の經驗と彼の存在との中に與へられる超自然的秩序を含み、同様にまた超自然的なるものが入り來るべき自然的秩序をも含んでゐる。彼は自分が哲學するに當つて、眞理と至福とに至らうとする第一の試みは、理性が信仰に、意志が恩

寵に頼ることによつて決着することを、忘れることが出來なかつた。眞理と善とが征服者たる人間の戰利品として獲得せられないで、神から與へられた賜物として受け取られるまでは、眞理を把握する我々の知的光りが如何に無能力であり、またそれと相待つて、善を行ひ得る我々の意志が如何に無能力であるか。は聖アウグステイヌスが先づ初めに經驗したことである、そして其の經驗には如何なる他のものよりも明らかな内的明證が伴つた。然らば、此の事實を他のものと等しく考慮の中に入れることを、堅固なる心理學的經驗論が何故に拒み、如何にして避けたのであるか。

聖アウグステイヌスは其れを回避しようとは夢想だにしなかつた、そして此の點では彼と同系に屬する最も眞正な者の一人たるメーヌ・ド・ピランも彼以上ではなかつた、メーヌ・ド・ピランは死の接近せるに脅威を感ずるや、彼の意識を探ねて其

處に恩寵の顯存に關して拒むことの出来ない徵標を見出さうとした。彼は恩寵が其處に存在するや直ぐにそれを所有し、直ちに其れに服した。併し聖アウグステイヌスは、より幸福にも、より早くからそれに服した、此のことは、超自然的秩序——其れによつて彼は眞理に接近したのである——が、常に彼にとつては哲學的探究の不可缺な部分であつた理由を説明する。學問を智慧となし、道徳的努力を徳性となすものは實に恩寵である、それなればこそ彼は基督教の中に於て、哲學を無用の冠頂と見ないで、哲學の中に基督教そのもの一面を見たのである、蓋し基督教は道であり、眞理であり生である。此の一面から考察して見ると、アウグステイヌス主義は基督教哲學とは異つたもの、其れ以上のものである、それは基督教哲學の特典であり、永續すべき模型である。彼を外にして人が見出すものは反基督教的哲學か、基督

教と相容れない哲學である、けれども哲學である限り而も基督教的であるためには、哲學はアウグステイヌス的であるか、さもなければ哲學でないかである。彼の自然の形而上學は恩寵の形而上學によつて完成せられる。何となれば、自然は基督教徒には恩寵のうちに於て與へられ、その恩寵は内部に於て働きつゝ、原因が結果によつて啓示せられると同様に、自然に於て明らかに知られるからである。

かくの如く、聖アウグステイヌスの哲學は、その本質の純粹さを取り戻せば、新しい能産的な道程を我々に與へてくれるやうに思はれる、しかしそれは其の道を促進することに勤しむ者が其れを裏切らぬやうに注意することを條件とする。聖アウグステイヌスの追放と言ふ痛ましい感情が熄むためには、聖アウグステイヌスから流離した者が、彼に歸ればよいのである。彼等は、聖アウグ

ステイヌスが、基督教的思想の中心に於て、聖トマス・アクイナスと並んで、存在することを決して熄めない處に、再び彼を見出すであらう、蓋し聖トマスは聖アウグステイヌスと相違したかも知れないが、しかし決して彼から離れたのではなかつたのである。

此の兩者を共に缺いてはならぬ理由は爰にある。外部からカトリック思想史を判断する人達は、トマス主義の今日の勝利を見て、たゞ歴史の偶然となすか、さもなければイデオロギー的策略の事實に過ぎぬとなしてゐる。けれども若し一つの宗教は一つの教導權によつて表されなければならぬことを人が認めるならば、又若し如何なる形而上學者がカトリック哲學の模範及び規範として考へられるかを人が訊ねるならば、聖トーマス・アクイナス以外に誰を人は選ぶことが出来るか。人は他の如何なる人をも、聖アウグステイヌスさへも、

選ばずして、彼を選ぶであらう。彼の業績は完全にして完結せるが故に、カトリック哲學を護つて、アウグステイヌス主義が遭遇したやうな間斷なく現れる歪曲を防ぐであらう。トーマス主義が潑刺として活動してゐることを考へて見れば、それ〔トーマス主義〕は完成せられたものである、綱格が先づ作り上げられて、その中に將來のその進歩が實現することが出来た。反之、アウグステイヌス主義には爲さるべきことが残つてゐる、而もその本來の性質上、永久に其れは残るであらう。カトリック教會が聖トーマスをその公認の學匠として選んだとすれば、最早其れ以上に論理的なことも、其れ以上に必然的なことさへも無いが、しかし人は、聖トーマスを選ぶことは聖アウグステイヌスを拒むことを意味すると思つて、反對するであらう。けれども此の兩者の教説は決して相容れないものではなく、却つて、基督教の見地から人

がそれを見る場合には、互に相補ふものであつて、その對立は、兩説が合理的探究を試みようとする宗教的實在性の無限に豊かであることを、意味するに他ならぬ。唯一の神のみ必要であつて、數は偶然なるものが現れたから現れたのである、問題はい、アウグステイヌス主義は基督教的思想が容易に無視し得るが如き偶然的なものであるか否か、を知ることである。我々は其れをかくの如きものとは信じない、これ即ち我々が簡單に其の理由を説明しなければならぬ所以である。

聖アウグステイヌスの著作と同様に、聖トーマスの哲學的著作も亦聖者の著作である。しかしこの事が認められるためには、聖アウグステイヌスの場合に於けるよりも、遙かに多くの時間を必要としたが、それには多くの理由がある、而もその理由のうちには彼の著作と同じく肝要なものがある。其れにも拘らず、人が長く彼に親しむ場合に

は、酬いられるところが多いのであつて、かくして見出す一切のものゝうちでも次の事が最も確實なものゝ一つである、即ち彼に就いても、彼の師・聖ドミニクスに就いてと同様に、*Aut de Deo, aut cum Deo* (神からか然らずんば神と共に)と言ふことを、眞理として人は語ることが出来る。此の明證を多少でも掩ふものは、一部分聖トーマスの主知主義であり、一部分彼の物理主義と稱せられてゐるものである。使徒パウロの *Invisibilia Dei* (神の見るべからざるもの) と言ふ有名な言葉は、彼に取つては、成し遂げらるべき哲學上の仕事の綱目となつた。彼が *ex quae facia sunt* (造られたるもの) の本性を究むることに専ら努めるのを見る限り、稍もすると我々は、彼が何を探ねてゐるか、を忘れ勝ちである。けれども彼が探ねてゐるものはたゞ神のみであり、神を彼が探ねるのは其處(即ち造られたるものに於て)である、と言ふこ

とも亦等しく眞理である。彼が現に見出すが如き自然のうちに、彼が現に見るが如き人間を取つて、聖トーマスは先づ、此の宇宙の如き宇宙がそのうちに充足の理由を有するか否か、若し其れが充足の理由を有たぬとすれば、何處にそれは存するか、を自分に問ふ。彼の辯神論が悉く本質的には宇宙論的である理由は爰にあるのである。人は往々聖トーマスの體系の鍵鑰を見出さうと試みる、そして神學大成 (*Somme theologique*) を良心的に探索した後、それを發見したと信する者が、我々に提示するものは、一般に概念である。けれどもトーマスの哲學は對象として觀念を有つものではない、それは諸物を對象となすのである、何となれば眞の哲學者は常に諸物に就いて語るものであつて、觀念に就いて語るものは哲學の敎授諸公であるからである。聖トーマスが諸物を探ねて絶えず心を向けた根本的對象・第一經驗は物理的變化

の事實である。彼はその本性、その制約、その原因を認識しよう欲した。其れこそ單に唯々一つの實在であるのみならず、現にあるが如き人間に最も明白な、一切のものゝ實在であると言ふ確信に達して、此の哲學者は此の出發點を、それが最も明瞭な最も受け入れ易いものなるが故に、最も善いものとして選擇した。このことは、かくして基礎づけられた形而上學が神に就いて我々に教へるものに關して、聖トーマスが幻想を描いたと言ふことを意味するのではない。我々は最も純粹な睿智なるものに達するために、最も粗雜な感覺的なるものから出發するが、しかしさういふ仕方では結局一つの *quia est* (何故であるか) に終つて、その *quid est* (何であるか) が我々から逃れてしまつても不思議ではない。しかし少くとも此の・何故であるか・及び我々が推測し得る僅かの・何であるか・は我々から逃れるのではない。此等

のものは明證と、一切の構造の基礎となつてゐる

原本的事實の堅實性とに關與する。如何なる理由で聖トーマスが此の哲學を選んだか、其れを問ふことには多少の幼稚さがある、哲學者と云ふものは決して哲學を選ぶものではない、彼は自分が眞であると判斷するものゝみを是認する。恐らく人は高々、彼がその下に居つた事情、既にアウグスティヌス主義が感染した汚染、此の教説が捲き込まれた紛亂の状態、を考慮に入れ得るに過ぎないであらう、けれども此等は要するに偶然的理由に過ぎないのであつて、問題の根本に於ては少しも變化を與ふるものではない。若し聖トーマスが聖アウグスティヌスの哲學をもつて最善のものと判斷したならば、その本質を再興することは彼に容易であつたであらう、然るに若し彼が他の事をなすことを選んだとすれば、それは自己の思惟の中に、もつと眞なる體系の可能性を見たからであ

る。

かく言つた上に更に附言し得ることは、自分で最善であると判斷した道を彼が選んだと言ふ事實そのものが、また同時に、其れとは異つた道を行くことを彼に禁じたことである。聖トーマスは、種々な哲學から借りて來た拔萃を互に綴り合せて、それに體系の外貌を與へることの出來る折衷主義者ではなかつた。彼は眞の哲學者であつた。そして問題の意味に關しても、その解決の様式に關しても、聖アウグスティヌスと一致しながら、而も此の解決の正しいことを特殊的に證明する仕方に於ては、其れが自分に満足を與ふるものと見えない場合に、彼に従ふことは許されないと信じてゐた。一切の選擇は限定を意味する。聖トーマスは辯神論に宇宙論的な基礎を與ふることに努力して、それに心理學的基礎を與ふることに努力することを斷念した。この事は單に非常に異つた二

つの領域を探究することが實踐上困難であるため、或は肝要な事柄を研究するに必要な才能が〔聖トーマスと聖アウグスティヌスとは〕相違して

ゐるためばかりではなく、また聖アウグスティヌスと聖トーマスが歩いた道が初めから異つてゐたためである。兩者は同一の結論に於て互に一致することが出来たが、しかし兩者を其處に導いた道は、絶えず互に交つたけれども、如何なる點でも決して同じ方向に向つてはゐなかつた、内的考察に於て聖アウグスティヌスは自分と競ひ得る者を一人も有たなかつた、乃で若し人が彼を見捨てるならば、その内的考察の廣汎なる領域は、悉く、恣に荒蕪するであらう、辛うじて彼が開拓した道は何れもそれを踏む者がなくなるであらう。神が人間の心に準備し給ふた此の上昇の道は、哲學者が哲學者たる限り冥想すべき對象であることを止めるであらう。神に通ずる可能的な道は斷

然閉鎖せられるであらう。而もその道は基督敎的思想の最も大なる利益のためには、恐らく開放して置くべきものであらう。

其の結果として、基督敎哲學の課題表は聖トーマスにも聖アウグスティヌスにも同じもの、即ち *invisibilia Dei per ea quae facta sunt.* (造られたるものによりて、神の見るべからざるもの)であることを、理解することが大切である。如何なる場合に於ても、神から出發してそれから被造物を演繹することは、人間には不可能である、却つて反對に被造物から神に登つてゆかなければならぬ。聖アウグスティヌスが勧めたものは、先づ第一に、神への道である。そしてそれを通るものは此の特殊の被造物、即ち人間であり、人間に於ては思惟、思惟に於ては眞理である、聖アウグスティヌスは個人的に此の點で傳承の實に貢獻したのである。次にはそれは眞理の本性と其の形而上學

的制約とを對象とする思辨を超越せる、一種の道徳的辯證法である、而して之れは人間によつてなされる、神の探究そのものを、その探究の對象となしつゝ、宇宙の偶然性よりも遙かに悲劇的であり、遙かに人に不安を與ふる偶然性が人間の心に顯存することを示さうと努むるものである、蓋しそれは我々自身の至福の偶然性である。如何にして、且つ何故に、諸眞理が我々に可能であるかを知る時に、人はまた何故に「眞理」を求むる願ひが我々に可能であるかを知らねばならず、我々のうちに召喚が顯存することを指摘しなければならぬ、此の召喚こそ外部から魂を活動させ、魂のうちに能産的不安を作り、魂を動かし、魂が結局神の手に息ふまでは、決して安息を許さないものである。盡きることなき豊饒な耕地が、分析と形而上學的反省とを待ちつゝ、其處に存在することは、人間のうちには神を求むる自然の願ひが存在する可能

に就いての、最近の論争が、充分に之を立證してゐる。聖アウグスティヌスは道を開いたのであるが、アウグスティヌス主義者達は、その道を歩みながら、彼の記述を證明と解し、彼等の感情を立證と解した時に、道を誤つたのである。彼等は全技術を創り出し、トーマス主義の嚴格なる要求に満足を與ふる愛の形而上學を建設しなければならぬ、そして自然に屬するものは自然に、恩寵に屬するものは恩寵に返し、道徳的制慾とそれが制約する認識とを辨別しなければならぬ、また從來なされたよりも遙かによく、計畫と秩序との區別を顧慮しつゝ、充分な語義に於けるアウグスティヌス主義の眞なることを立證しなければならぬ、換言すれば、將來に於て眞理であるものに、過去に於て眞理であつたものを附加するのであつて、單にそれを確立し、或はまた往々それを縮少するのではない。トーマス主義の偉大なる優越性の一は、

アウグステイヌス主義の結果を同化する充分な創造力であつた、乃で今日唯一の問題は、アウグステイヌス主義にも、自ら崩壊することなく、聖トマス・アケイナスによつて完成せられた決定的進歩を同化する充分な創造力があるか否か、を知ることである。

我々は其れを望みたい。他の道が可能であるといふこと、またその道が聖アウグステイヌスの夫れよりも長所を有するといふことさへ、我々は個人的には信じてゐる、しかし聖アウグステイヌスの其れが不可能であるといふこと、また其れがたゞ短所しか有たないといふこと、それを我々は認めることが出来ないであらう。先づ人は彼の異常なる哲學的生命力に打たれないでゐることは出来ない。我々の意見によれば、聖アンセルムスは、彼が神の觀念の起源及び其の本體論的基礎の根本問題を捨て、論證の重荷を概念其のものゝ内的

必然性の上に移した時に、正しい道を脱したのである。神を導き出さうとする彼の手段は人を信服せしめない、そして人は何等かの價値を有つてゐるものが、前面に顯はに置かれたものよりも、寧ろ掩蔽し等閑にせられてゐるものにあることを感知する。其れの背後に神が見出される深祕の門に彼が手を觸れてゐるのは、「プロスロギオン」(Prologion)の證明の中ではなくして、此の論文(De Veritate)の中である。けれども聖アンセルムスは、神の徴標が存在し、それによつて被造物はその能造者を認識すると言ふ・人間の心に膠着力のある信念を、即ち *Signatum est super nos* (我々の上に徴標がある) ことを證する優れた人である。デカルト、マールブランシュ、ライブニッツ、ヘーゲル、は夫々聖アンセルムスの足跡を辿つて、各々独自の態度で此の感情の永續性を立證した。

また他方に於て、バスカルとメーヌ・ド・ピランとは、道徳的・宗教的な辯證法の生命力を確證した。かくも長い間に亘つて、哲學的反省が、總じて、果しのない道を、熱心に辿るものではない。それは模索し、誤謬を犯し、途を外すかも知れないが、しかし必要があれば、その出發點に立ち歸つて、更新し眞理への新たな道に上ることが出来る。

爰にアウグステイヌス主義が爲すことの出来る、また爲さねばならぬ、ものがあると我々は思ふ。この事柄が爲されるためには、トーマス主義そのものゝ進歩が根本的に大切である。アウグステイヌス主義がトーマス主義と接觸して、嚴格さに於て、あらゆる種類の訓練や潤飾に於て、得ることが出来る一切のものを示すことは容易であるが、しかし聖トーマスその人も、聖アウグステイヌスの如き人がなければ聖トーマスの如き人も亦存在し得ないことを、證明するために其處に存在

する。師がその優れた先覺者から集めて來た——しかし外的な折衷によつてははなく、眞の吸収と同化によつては——ものを、弟子共も、若し更新せるアウグステイヌス主義者が同化するべきものを提供するならば、また集めることが出来るであらう。けれども此のこのためには、アウグステイヌス主義そのものが、聖アウグステイヌスの場合と同様に、同化者であり創造者でなければならぬ。其れはさうあることが出来るであらう。それは若し自分の眞の仕事が近代觀念論の失敗したものを充分成し遂げること、またそれを心理學的實在論の土臺の上に建てなほすことであることを顧慮するならば、さうあることが出来るであらう、蓋しその心理學的實在論にアウグステイヌス主義は自然的な基礎を見出し、また其の上のみに初めて強固に構成せられるのである。若しかくあるならば廣汎な未來がアウグステイヌス主義の前

に開かれるのである。アウグステイヌス主義は現代思想をして眞理を合法的に所有せしむることが出来る、蓋し現代思想は、眞理が現存することを臆げに感じてはゐるが、〔それを取る場合には〕誤謬をも共に取得するが故に、遂に把握するに至らなかつたのである、アウグステイヌス主義によつて、基督教は更めて淨化し、解放し、創造する仕事を完成することが出来る。一切のものが此の仕事にアウグステイヌス主義を招き、其れを期待してゐる。アウグステイヌス主義をして之を企てしめよ、さうすれば其れが眞である程度に應じて、其れは何者をも、教會をも、まして況んや他の一切をも、恐れる必要はない。〔またそれは〕カトリック主義の統一に關はるものでもない、その統一は作らるべきものではなく、既に作られてゐる。過去六世紀の間トーマス主義とアウグステイヌス主義とは互に並んで道を歩いた、六世紀以前乃至

十五世紀以前まで〔九世紀間〕は、教會の生活に大事はなかつた。アウグステイヌス主義とトーマス主義とは尙ほ長く追放の道を辿るかも知れない。此の兩主義は、彼等が一層完全なるものたらうとするあらゆる首尾よき努力が、此の兩者を次第に接近せしむることを避けることが出来ないであらう。何となれば彼等の源泉も同じ場所に、即ちカルワリアにあり、其の目的も同じ場所に、即ちタルボルにあるからである。

註

以下の註の中で*印を附したものは譯者が附加したものである。

1、*デカルトの『省察録』が公にせられるや、アルノーが彼の cogito ergo sum の原理は、聖アウグステイヌスの *si fallor sum* の夫れと符合することを指摘した。ところがバスカルは、假令言葉が一致しても、此の原理がその哲學に對して有つ意義は異なることを主張した。實際、デカルトが此の偉大なる聖者〔アウグステイヌス〕の著述を讀んで甫めて其の原理を「知つたのであるとしても、私は、デカルトがその創案者でない」と、斷じて言ふことは出来ない。何となれば、長い間

廣い版圖に亘つて充分反省することなく、あてつづばうに一つの言葉を書くこと、此の言葉の中に、物質の性質と精神の性質とを區別する稱讚すべき連続した歸結を見出し、デカルトが主張した如く、それを全物理学の確固不變の原理となすこと、が、どんなに異つたものであるかを、私は知つてゐるからである。蓋し、彼が此の主張をよく成し遂げたか否かを吟味しないで、私は彼が成し遂げたと思像するのである、そして、恰も生命と力とに充ちた人間が死んだ人間から異なるが如く、「デカルトの」此の言葉が、「アウグステイヌスの」次序に語られたかの言葉と異なることを主張するのも、たゞ此の想像のうちに於て々ある。」(Pascal, Pensées et opuscules, publiés par L. Brunschwig, p. 193.)。ゲルソンの「バスカルは……デカルトを祝ふた」と言ふのは、恐らく此れを指すものであらう。

2、我々は此の表現をヴァインテルマンに借りた (Cp. Lehrbuch der Geschichte der Philosophie, 12. Aufl. S. 232.)。蓋し充溢した形而上學となつても、それらは、内的經驗によつて越されることはないからである。

3、我々は幸にも此の點に關して、グラップマン師 (Grabmann, Die Grundgedanken des heiligen Augustinus über Seele und Fortz. edit. 1929, p. 20—21) と、充分一致するものがある。

4、聖トーマスの哲學が、此の點では、聖アウグステイヌスの傳承と完全に一致することを、我々は他のところで主張した。尙ほ Archives de Philosophie, VII (1930), p. 181. に於けるデュエソットのモンノー (P. Monod) の興味ふかき注意を見よ。

5、それ故に、アウグステイヌス主義者にとつては、聖アンセルムスの *fidus quereus intellectum* (知性を求める信仰) が、合理主義者と言はれる哲學者達の團體から彼を破門したのではなく、却つて、彼の見るところによれば、合理的哲學者達が眞の哲學を離れたのである、蓋し彼等は理性の努力を、經驗の廣汎なる版圖に、特に内的經驗——それは恩寵の生活によつて精神のなかに生ぜしめられた結果の夫れである——の版圖に、向けることを拒んだからである。彼等にとつて眞である一切のものは、彼にとつても眞であるが、しかし決してその邊ではない。

6 * 此の言葉及び次の「造られたるもの」に就いては、ロマ書一ノ二〇を見よ。